

幼児児童性格診断検査に関する一考察

・田崎陽子・赤津君子・原田真弓

神田寺幼稚園

前回、「五才児にみられたクラスカラーと保育について」ということで社会成熟度診断検査より、わが園の傾向・親と教師の見方の違いなどを調べました。そこで今回は、幼児児童性格診断検査より、保育というものを考えてみようと思います。

一 目 的 —

日々の保育のなかで、特に教師の手のかかる幼児と、それほど手をかけなくても集団生活についてこられる幼児とがいます。また、幼児自身のもっている性格によっても、保育活動や遊びにおいて行動が異なるようです。そのさまざまな性格をもっている幼児は、園生活においてどのような過ごし方をしていたのでしょうか。幼児の性格と活動とはどのような関係があるのでしょうか。

そこで、幼児児童性格診断検査において、「十分な指導を要する」「要注意」あるいは「良好」と結果のでも幼児について、園生活のなかにあて事実性格と活動とにどのような関係があるかを、調べてみることにしました。

一 方 法 —

昭和44年度児(72名)、昭和45年度児(60名)の五才児について、前者後者ともに2月の末頃に幼児児童性格診断検査を実施している。日常保育で教師の目にとまりやすい、好ましくない幼児・特に好ましい幼児をみると、だいたいクラス全体の動向をつかむ事ができる。また特に問題のないクラスの幼児が多い時は、クラス全体の活動にそれほど変化もみあたらないようなので、前記の資料を基に整理した。

1) 44年度・45年度の五才児(132名)の幼児児童性格診断検査結果のなかから、10項目ある特性のうち「十分な指導を要する」「要注意」というランクに3項目以上結果のでも幼児を抽出した。さらに、10項目すべて「良好」のランクに結果のでも幼児を抽出した。

2) (1)で抽出された幼児について、幼児の活動や成長の変化を知る手がかりとして、保育日誌(ク

ラスの傾向及び個人の記録)と指導要録に記述されていることをめざし、合わせて社会成熟度診断検査結果、WISC知能診断検査結果をも参考として使用した。

一 結 果 ・ 考 察 —

1) 幼児児童性格診断検査結果であるパーセントイルプロフィールにおいて10項目の特性のうち3項目以上「十分な指導を要する」「要注意」のランクに結果のある幼児は、44年度6名、45年度12名、合計18名である。10項目の特性のうち、内容的には「神経質」「情緒不安定」「学校への不適応」の3項目においてパーセントイルが低くでている。18名のWISC知能診断検査では、優4名、中9名、劣5名という結果がでている。また、社会成熟度診断検査の内容をみると、「ことば」の項目で明らかに低くなっている。さらに保育日誌のなかから18名について個人の記録のあるものを抽出し、——記録の量は幼児により多少はあるが——指導要録の記録と照合すると、2つのタイプに分けることができた。1つは、集団というカにおされてしまう自主性の乏しい気の小さい幼児であったことがうかがえる。さらに1つは、気は立って小さくなく、仕事などある意志もあるのだが気が散ってしまう幼児である。

2) 幼児児童性格診断検査結果であるパーセントイルプロフィールにおいて10項目の特性すべて「良好」のランクに結果のでも幼児は、44年度7名、45年度14名、合計21名である。この21名のWISC知能診断検査では、最優5名、優8名、中8名という結果であり、社会成熟度診断検査では、優11名、中9名、中の下1名という結果である。そして、社会成熟度診断検査結果の内容をみると、「自己統制」の項目で高い幼児が多く、「からだのこなし」の項目で多少低い傾向がある。さらに保育日誌より個人の記録を抽出したものの——記録の量は幼児により多少はあるが——と指導要録の記録と照合してみると、次のようにまとめることが

できた。他児に迷惑をかけないという品行方正型であり、環境に変化が生じてでも受け入れ体制ができていて、なんとかその場の状況に合わせることでできる柔軟性をもっている幼児がほとんどであり、集団の中でも発揮できる特異な能力—例えば絵画言語能力など—をもっている、それを素直に活動に移すことのできる幼児の多いことがうかがえた。

3) 44年度児（ユクラス）については、幼児児童性格診断検査結果において、「十分な指導を要する」「要注意」の幼児人員と、「良好」の幼児人員は、1組が4対4、2組が2対3とほぼ同数であり、クラス全体的にみてもおちついており、平均していると言える。しかし45年度児については、1組が11対2、2組が1対12と「十分な指導を要する」「要注意」の幼児人員と「良好」の幼児人員の差が大きい。45年度の1組は、日誌から、他児の迷惑を返りみないで勝手な行動をとる幼児が数名あり、自主性がなく、先の幼児に同調してしまう幼児がいた事がうかがえ、全体的に一度の指示で行動を移せない、強い注意を必要とするクラスであった。また、45年度の2組は、交友関係、遊戯など全ての活動において問題はないが、そのとりくみ方は消極的であつたことが日誌よりうかがえた。

4.) 「良好」という結果のもて幼児は、自分の好きな事、あるいは特異なものを生かして集団というものに体当たりできる能力をもつことができ、体当たりできることによつて他児ともい、しよに行動できるわけである。しかし「十分な指導を要する」「要注意」という結果の多い幼児は、集団というカに体当たりする手段をもっていないために自分から行動をおこすことができず、自信をなくし、教師の刺激があつて始めて集団に反応するのである。一方、保育日誌は調査のためのものでなく、日々の保育結果を記すものであるため、絵画音楽言語面でも多く与えられてしまつて傾向がある。また、ひどいいたずらや暴力、あるいは集団生活に全然なじめないなど、他児に迷惑を及ぼす幼児は、特に書かれていることが多い。従つて個人の記録を保育日誌から抽出しようとする時、幼児によつて書かれている量には差が生じてくる。

幼児を指導する過程で、どのような材に注意していったら良いか考える時、幼児のもっている良い面を見つけて生かしてあげようと努力している教師は多いと思われる。しかし、日誌の中に良い行動よりも悪い行動の方がより多く書かれている。その事から、教師は集団に迷惑をかけるような幼児をより多く目にとめていたものと思われる。

幼児の活動を理解する時、教師は集団生活に迷惑をかける幼児にのみ目をつけたいことが必要であり、良い点をさがし、良い方向から幼児の行動をみる習慣をもつようにつとめ、良い面を適確にとらえ、この点が成長するようにつとめがける必要がある。

— 資料 —

幼児児童性格診断検査において「十分な指導を要する」「要注意」のランクに3項目以上結果のもて幼児例。

氏名性別	活動特徴	生年月日	IQ	SA
瀬戸 子	理解に時間がかかる。理解すれば、真面目にとりくむ。自主性に乏しい。リズムは不得手。③⑤⑥⑧⑨⑩	38.10	99	70
小沢 子	知的な面の興味は旺盛。勝手。常識がない。すぐ泣く。絵画は不得手(清手も嫌い)。②③⑦	39.12	130	165
田中 子	興味があつた。じつと行なうが、あつくと勘当。要領が悪い。衝動的な行動がみられる。②③⑦	39.7	112	123
角田 子	何でもことごとくできる。行動は早い。細かくてゆい。自分の得意で何日でも行なう。絵画や算数で自分の得意をつくりだす。ひきつり好きな遊びをしている。②③⑧⑩	39.8	126	123
山田 子	自主性に乏しい。依存的。はつきり。簡単。便乗してぶけるようにもつた。②③⑤⑥⑧⑩	40.2	126	132
西川 子	意見はいい。競争心がある。おちつきがない。自信のないものは消極的。①②③⑥⑨	39.5	113	89

活動特徴……保育日誌・指導要領より個人の記録を抽出したものをまとめた。

I.Q.………WISC知能診断検査結果(5月施行)

S.A.………社会成熟度診断検査結果(3月施行)

※幼児児童性格診断検査の特性項目

(「十分な指導を要する」「要注意」のランクに結果のもて項目)

- | | |
|----------|----------|
| ① 顕示性が高い | ⑥ 退行的 |
| ② 神経質 | ⑦ 攻撃・衝動的 |
| ③ 情緒不安定 | ⑧ 社会性なし |
| ④ 自制力なし | ⑨ 家庭へ不適応 |
| ⑤ 依存的 | ⑩ 学校へ不適応 |